

博 慈 会

老研一口伝言

未病医養成講座 その1

● 夫婦の顔はなぜ似るのか

街を歩いていて、ふと気づくことがあります。それは「すれ違う夫婦の顔がどこか似ている」のです。血のつながりがあるわけでもないのに、まるで兄妹のように思えることさえあります。このように感じる方は私だけではないでしょう。さてこの現象は単なる錯覚なのでしょうか。それとも人間の深い本性が映し出されているのだろうか。未病医を心がけるモノとしてはチョット気になる課題なのです。

● 人は無意識の安心感を好む

心理学や社会学では、これを「同類婚」や「類似性の法則」と呼んでいます。人は自分と似た価値観、似た雰囲気を持つ相手に安心感を覚える、という説があります。また顔立ちや体格もその例外ではなく、無意識のうちに似た特徴を持つ相手を選ぶ傾向があるらしいのです。無意識の安心と言います。たとえば目の大きさや輪郭の形など、細部は異なっているとしても全体の「印象」が近ければ親近感を抱きやすい。結婚に至る相性の良さは、こうした「似ていること」に裏打ちされているのかもしれないのです。

● 時間が作る皺の形

さらに、結婚して長い年月を共にすると、夫婦は表情や仕草まで似てくる。笑いのツボも怒りのポイントも、同じように積み重なっていく。喜びや悲しみを分かち合いながら暮らすうちに、顔の筋肉の動き方が同じパターン

を繰り返し、やがてしわの刻まれ方まで似通ってくるのです。これはいわば「時間がつくり出す肖像画」といえるでしょう。

一方で、人間は見慣れたものに美しさを感じる傾向があるとも言われます。日々、相手の顔を見つめ続けるうちに、その表情や雰囲気が「自分の一部」として馴染んでいく。そしてその馴染みこそが「似ている」という感覚を強める可能性もあります。

夫婦の顔が似るという不思議は、理屈だけでは語り尽くせない所があるのも確かです。似ているのは顔か、それとも心なのか。互いに映し鏡となって歩んできた証が、いつの間にか表情に刻まれるのかもしれませんが。街角ですれ違う似た顔の夫婦は、長い時間を分かち合ってきた人生の肖像そのものなのでしょう。未病医を心がけるヒトはいつでも何処でもチョットした相違に鋭く現象を見極めることです。このようなこころがけを持つことがその技が磨かれ、やがて未病医として役に立ててきます。それでは街に出てこれだと思う二人連れの顔を観察してみましょう。

(老人病研究所 所長 福生吉裕)

